大平府回顧

歩四五一五隊
歩上等兵　宮田敏雄

餅つき

敵の首都南京を陥し入れて　初めて迎へる陣中の正月は特に楽しいものでした
何處から　何うして集めて來たものか　杵臼　粉等一式が揃つて　各小隊共陣中餅搗が始りました
髭顔に向ふ鉢巻も勇ましく　意氣の良い勇士が杵を振り上げれば　姉さんかぶりに玉だすき愛嬌たつぷり　器用な手つきで之に應じます
やんや〳〵の大喝采　お鏡を取り小餅も大小いろとり〳〵に出來上ります　生餅のプ

ーンと鼻をつく香に國の年の瀬を偲ばれました

× × × ×

門松

何處に居ても故郷の風習は偲びたい　あの殺風景な大平府の街に門松が立ちました
日ノ丸の旗が立ち並びました　小隊に分隊に　思ひ〳〵にこつた飾つけが出來て居ます
外も内も正月氣分横溢です
正月料理の罐詰は卓上に並べられ一同ニコ〳〵顔で
「御目出度」
「ハイ本年も相変らず」
と祝ふ　トソは千ヤン酒です　どの分隊にも老酒の甕が二三本ちやんと備へてあるから豪氣なものでした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

下戸も上戸も千鳥足…心から戦塵を洗ふ嬉しい想出　大平府の正月でした

× × × ×

即製ペーチカ

これも懐かしい想出の一つです　寒い戦地の御馳走は何より火です・然し木炭などあらう筈がありません

誰れの発明かドラム罐に穴があけられました　穴からは煙突が通され　灰取口が切り開かれました　見たところ怪異極まるこのドラム罐　火を燃せば燃すほどに空中がぽか〳〵と温まり正に常夏の國に居る様です

更に有難いことには　この即製ペーチカの天井はその儘唯一の調理鍋です

創も即座に焼けます　すき焼も右から左

實に調法此の上なしといふしろ物でした

× × × ×

葱と豚

廣い〳〵葱畑がありました　豚も豊富でした　牛も居ました

朝からもう葱と豚　牛と葱　ドラム罐は實に有効に活用されました

お蔭で室中は皆葱の臭がしみ込み裝具も戦友も後では葱臭く支那人の様な体臭をはなつ様になりました

北支中支で六ヶ月　飲まず食はずで苦労した戦友達の痩せた頬がふくよかにふくらみ落ち窪んだ目玉が日増しに出て参りました

大平府の葱と豚が漢口までか氣力体力を養って呉れたと思ふと忘れられません

× × × ×

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

寝室

「朝に玉公　夕に乞食」といふ言葉が我々兵隊にも當てはまります

此處天平府の宿舎には一畳半位のダブルベットがありました

天井も張られ　四周は美しいカーテンがあり　長い鏡まで備へてあります　そして長い二人用枕のカバーには

SWEET DREAM（あまき夢よ）

と英字で刺繍してありました

山に伏し野に假寝した我々には正に玉公貴族の思いです　然し共に誓ひし戰友のことを思へば　寝苦しい夜が幾夜となく續きました

× × × ×

物乞ひ

「小さい子供迄ボルを持って何十人となく群を為して各宿舎に押し寄せる

「大人メシ〳〵」

と殘敵を黄公に乞ふ哀れな姿です

敗殘國のみじめさを端的に物語る情景の一つです

そう〳〵いい顔ばかりも出來ません　うるさい〳〵と追っ掃ふと直ぐ又後からゾロ〳〵と寄って來る

誰れの心の中にも

「敗けたらおしまひだ」

と言ふ天與の暗示が強く深く刻み込まれて行くやうでした

× × × ×

酒保

久し振りの酒保　これが又忘れられぬ一つであります　思い〳〵に好きなものを求め

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

て 鋭氣を養ひました
地方人の賣店なども出来 半島の婦人など
もちらほらと見受けられ 急になごやかな
風氣がただよいました

× × × ×

雪

雪が二回降りました
荒されたまゝ街きたない家みじめな焼跡が 白
銀一色に塗りつぶされ 古めかしい塔が白
く輝き乍ら厳然とそびえ立った繪のやうな
光景が今でも目に浮びます
この雪の中に非常呼集があつて行軍で行悩
んだのも想出の一つです

× × × ×

クリーク

クリークでは隨分魚をとりました 鵜飼も
やりました
凍つたクリークに小石を投げると浜千鳥が
鳴く樣に チ チ〈〈 と聲を立てゝ滑つて行
それが面白くて子供の樣に嬉しがつて投げ
たものです

× × × ×

運動會

二月下旬の暖かい日でした 支那修育場で
大隊の運動會が擧行されました 各中隊の
對抗です 競技よりその應援が振ひました
鬚自慢の應援團長が大旗を振つて怒號し
ます 石油罐をがん〈〈たゝく 大鼓をド
ン〈〈打つ 拍子拍子の器用な隊もある
といつた調子で それは〈〈大賑ひ 流石
鳴り物好きの支那人達も顔敗けの態でした
私の中隊は二等で一等の酒樽が取れなか
つたのを殘念がりました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

空中戰

三月十四日壊かしの大平府に別れて　蕪湖飛行場附近に差しかゝった頃　天地を震動させる大音響　皆吃驚仰天　文字通り天を仰ぎました　三台の飛行機が入り乱れての空中戰です

一機が沖天に二三回旋回したかと思ふと急轉直下流星の如く火の尾を引き作ら地上に落ちました

パラシユートが天空にフワリ〳〵漂ふ　それを見守る様に友軍の二機が遠巻きに旋回しながら下降します

敵の操縱士は生捕りになったと聞きました

そしてその男は蘇聯人だったと言ふ事でした

エンピの手紙

歩四五ノ一〇　白坂、上等兵

大平府に居る時の話です　當時歸順して來た敗殘兵を五名苦力に使って居ました

「ニイヒ、ニイヒ」ではさっぱり区別がつきませんので一人〳〵名前を附けてやりましたが　凡て覺え易い名がいゝといふのでエンピ　ハイノウ　ザツノウ　ハンゴスキドウと決めました

苦力も大喜び　エンピと呼べばハイと答へる　といった具合に皆實に良く働きました

所が愈々移動することになりましたので　この五名の苦力も郷里に返すことになり　餞別など貰って別れを惜しみ作ら歸って行きましたが

何うしたことか　エンピとザツノウの二人

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

は同もなく帰ひ戻って来ました
話をきくと　帰る途中で中國兵に襲はれ
ハイノウとハンゴ　スイトウらの三人は連
れて行かれたが　二人だけは命からゝ逃
げて來たといふ訳　でした
そして何うかもっと使ってくれと哀願する
ので仕方なく其後も暫く連れてゐましたが
丁度幸ひ春田軍曹殿が南京の方に行かれ
るので一緒に連れて行って貰ふことに致し
ました
大分経ってからそうです多分帝國の警備に
ついてゐる時だったと思います「エンピ」
から手紙が参りました
念入りにエンピと名前の傍に書き添へてあ
ますが何しろ漢字ばかりで譯がわかりませ
んので旅團の通譯の人に讀んで貰ひますと
「死んでゐた筈のところを助けられて　そ
の上春田大人にわざゝ郷里まで送ってい

たゞいて本當に有難かった　無事に帰りま
したので父母も大いによろこんで居ます
御恩は決して忘れません若し帰國の折は一
日でも立寄って下さい　お禮のまねだけで
もしたいからと言ふ意味の事が書いてあ
り最後の方に班員一同の姓がズラリと書き
並べて如何にも眞心のこもった手紙でした
そしてむづかしい自分の本名の傍には例
の通りエンピと書き添へてあります
何んとなく懐かしく　一同といいことをし
たと喜んだ様な次第です

[illegible]

歩四五ノ十一
・歩兵准尉　濱田友太郎
南京攻略戦斗から此の方戦斗らしい戦斗を

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

し左い我々は少々淋しさを感じてゐた矢先討伐戦斗には珍らしい大激戦を致しました。それは聯隊縁出動で水泉簇の敵の根據已圍殲戦です。

全員張切つた元氣で六時宿舎を出発し先づ鬣山附近一帯の敵陣地を攻撃する為午前七時から双鎖に於て準備を整へ八時から愈々攻撃開始十二中隊は左　中隊は右第一線として攻撃の火蓋は切られました　中隊の正面は平地で損害もなく思ふ様に攻撃は進捗しましたが十二中隊正面は高地に頑強に抵抗し攻撃は意の如く進捗しないのです　大隊長より十一中隊は一時攻撃を中止せよとの命を受け敵と對陣の形です　折しも前線に敵は喇叭を吹奏して逆襲して来ました　中隊正面側面からは猛烈な射撃と共に迫撃砲弾の集中火　二三十米内外に旺んに炸烈する

中隊の右第一線小隊である第一分隊の居る部落内には十數発落下し火災を起して火焔は猛々として昇る　敵は迫撃砲四門を有してゐるらしい

十二中隊正面は相當の激戦らしく續烈な銃聲手榴弾の炸裂する音或は喊聲　實に壮烈なる戦況です　死傷者も續々運ばれて来る　然し十二中隊も山を占領し中隊と同一線に進出しました　第二線陣地からは砲爆弾射弾は飛来する　其の中で交互に書食　弾薬の補充　死傷者の處置及次の攻撃準備を整へ　今度は十中隊左　中隊は右第一線となり二線陣地の攻撃開始です　彼我の銃砲弾は猛烈を極め戦場は再び活氣を呈して来ました　敵の頑強なる抵抗を受けつゝ力戦奮斗遂に午後六時半には目的地を占領する事が出来ました

そこで兵力を集結して愈々追撃です　十中

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

隊が尖兵です　逃足立ったチャンコロは道路上を或は山中に散り〳〵バラ〳〵です、両方山の獣路を追撃中には数回側射を受けましたが　暗夜の鉄砲で當らぬこそグングン水東鎮に向ひ前進しました　歩き乍ら飯を食ひ　寝ら寸の行軍です　午前十時張村着　直ちに水東鎮攻撃です　三方より包囲せられた敵の根據地水東鎮も早袋の鼠です

遂に敵は全滅しましたが　大隊にも死傷約十名を出しました

水東鎮を掃蕩した大隊は午後六時三十分帰還の途に就きました　が之れからが問題です

中隊は尖兵中隊第一小隊を尖兵として前進午後八時三十分牙山嶺に差し掛りました

牙山嶺は「白銀坂」よりも傾斜急峻で山脚から峠まで三十分を要し峠は鞍部を成し其の両側は五十米もあるかと思はれる高い高地で道路は約一米石を畳み急峻な斜面を斜に通ってゐます、待伏するには屈強の場所です　自分の前の兵を通視する事も出来ない真の闇夜　警戒に警戒を加へ乍ら尖兵の前方斥候濱崎分隊長は峠の下二十米迄前進してゐました　何も変った事もなく皆んなは

「もう敵も居ない峠にゆけば休憩だぞ」

「、後一息だガンバレ」

と全員フウ〳〵汗を拭き乍ら登　其の時

「パン〳〵〳〵」「シュ〳〵〳〵〳〵」

と小銃　軽機　機関砲を据えた敵の不意の一斉射　敵弾は各所の岩角道路上の敷石に中り敵の手榴弾は大音響と共に眼前に炸裂して花火大會を見る様です　將に文字通りの火の雨火の海です

敵は主力を以て峠を　一部を以て左右の高地を占領してゐる

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

此の時中隊の後尾は峠を登り初めてゐました　此の難局を打開するには左右何れかの高地を占領する只一つしかない　自分は其の時既に一小隊長塩見中尉の處に行つてゐました　一小隊の安否を案じたからです

手榴弾は前後左右に落下するそれ破烈前に拾つて敵の中に投げる聲を出すと危險なので二百米後方中隊長の處に連絡に帰り

「一小隊は今の處少しも動けませんから二小隊か三小隊を左高地を側方より占領させては如何ですか」

と具申すると

「そうして呉れ」

との中隊長の言葉に早速第一線に馳せ帰り二小隊を右に三小隊を左の高地を占領する如く命じました。

然し左右に移動せんとすれば敵はその移動方向に自動火器を集中し而も岩石凹凸たる急斜面で到る處藪あり道路外の行動は非常に困難である　其れに我は散開する余地もなく二百米の行軍縦隊になつてゐるのです

小銃を射つに術なく唯頼るは擲弾筒のみであるが最早や其の弾薬も僅少でした

二、三小隊の進出は全く進捗しない　自分は古城　田代両上等兵を伝令として連れ三度第一線に到り

「此のまゝ居ると敵に乗ぜられ全滅を覚悟せにやならん　一部の犠牲を覚悟して正面突破をした方が可ならず」

と塩見中尉に具申すれば

「よし其の方がいゝ」

と言はれる内にも手榴弾はボン〳〵火花を散らして落下する左には宮園分隊が警戒に出てゐる　前方には濱崎分隊が出てゐます

自分は濱崎分隊の安否如何にと古城上等兵を伴ひ前進漸く坂元一等兵松元上等兵を探

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

し出しましたが、分隊長以下の姿が見えない、が坂元一等兵が分隊長は大丈夫ですと言ふ（其の時濱崎伍長は既に敵の左側十五米に進接し突喊好機を待て居た）と此の時です間を衝いて迫る宮園伍長の元氣な聲

「小隊長殿第二分隊は左の高地を占領します」

宮園伍長は出征以來中隊きっての豪の者此の最も中隊の苦戰中に於ける此の一言の嬉しさ實に拜み度い心でした

元氣な宮園伍長

「第二分隊前進」

の號令と共に分隊の者（小野鮫島西堀之内、深迫中尾）は圍の中を左に移動を開始しました　敵彈は益々猛烈　手榴彈は火花を散らして落下する　擲彈筒手福元上等兵は第二分隊の移動を見るや殘彈數発を以て左高地のチェックに對し独断射擊を爲し三発目に命中其の射擊は止みました

「左高地のチェックは喜滅したぞ今の中に二分隊は占領せよ」

「第二分隊」

「宮園分隊」

と呼べど〳〵返答はない

敵は我を偽り此方の眞似をする　如何にも敵にナメられた感で癪だが仕方がない

「嗚呼宮園伍長は既に戰死したか」

「第二分隊はやられたか」

最早や擲彈はなし愈々一小隊は肉彈突喊を塩見中尉の面には悲壯な決心の色が現れ突喊の態勢を整へて居られる　其の時

「第二分隊左高地占領」

正しく彼の遠き過る宮園伍長の聲　そして峠の敵に對し輕機關銃の打下し　敵彈炸裂の音に混り堀之内一等兵の占領二分隊高地占領の連聲

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

オイ何だる進撃 左聲が敵は此の二分隊の不意の出撃に早くも逃げ腰 此の時一小隊は峠に 二、三小隊は右高地に中隊は一斉に突撃敢行 自分は一小隊と共に行動 交戦三時間牙山嶺の堅陣を遂に占領したのであります

占領後宮園伍長の談

敵と岩許りで前進が思ふ様に行かず部下は逐次後れて参りましたが分隊の占領が後れると其れ丈中隊に損害があると思つて分隊の集結も待たずに一部で突撃しました 又小隊から第二分隊と呼ぶ聲もよく聞えましたが返事をすると敵に察知されて側背から不意突撃が出来ないと思つて返事をしませんでした

「お前の分隊は全滅したかと心配したが全員元氣でよくやつて呉れた 有難う 御目出度う」

と心から感謝しました

然し本戦斗に新留伍長 山小田一等兵は名誉の戦死を遂げさせた事は返すがへすも残念であります

水源地の警備

歩四五 皿一〇

歩兵軍曹 野平 秋一

昭和十三年三月聯隊は宮園附近の警備に付いてゐました

四月十九日第三大隊は野口大隊長殿の指揮で水東鎮附近の討伐に出動する事に成ました

その時私は分隊長として参加しました 當日は天候良く十二時頃水東鎮東方約一粁附近の部落に到着しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

洩日薄夜の戦斗及行軍の疲勞恢復に晝食を兼ねた約二時間位の大休憩がありました

午後二時頃から水東鎮の攻撃が開始されました　中隊は右第一線で私の分隊は左方警戒の任務を受け前進しましたが　附近には大した敵も居く分隊の者と山脚に沿ひ陰部を利用して前進中　山脚の岩石を乘越えんとする時　岩穴に待伏してゐた四五名の敵が私等を拳銃で射たうとしてゐます

不意を喰った私等は岩影に遮蔽し應戰しましたが　敵は天然のトーチカを利用し私等を射撃します

敵との距離は僅か一〇米位しかありません

入口不明の洞穴で突撃は出來ず　手にした手榴弾を洞穴目がけて投込みました

天然の掩蓋で効果は無く残念ながら止むを得ず突撃口とその動機を覗ってゐました

敵の手榴弾が私の足元に落下しましたが

第一発目は不発で何等の負傷を致しませんでした　而し敵は小癪にも二、三、四発と続いて投擲しますので　私等は一度位置を換えて山脚を流れる水深約一米三〇の小川に飛込み　一時の危險を免れんとしました　その擧動を目視した敵は好機來れりと小川見かけて手榴弾を投擲します　激しい手榴弾の攻撃を受け　私も今は是迄と觀念してゐました

不思議な事には身辺三尺と離れない水中に數発の手榴弾が炸烈し水柱が一丈余も揚りましたが　私は擦傷一ツ負はず自分ながら神佛の御加護と思ひました

水中に炸烈する手榴弾の威力なきを痛感しました

私は幸に九死に一生を得ましたが可哀さうなのは小川で遊ぶ魚でありました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

夜間敵虎口を脱出

歩四五　三ノMG　相往　隆

昭和十三年四月二〇日午後五時弾薬補充を兼ね負傷者数名を護送して駄馬三〇頭及び小銃一ケ小隊　宿営地たる西湯村にかへる事になりました

午後九時　弾薬を補って駄馬隊援護隊が又一線に向ふ時は雨空で　月は出ず　真の闇でした

本道から脇道傳いで一歩の足を踏むにも見當がつかず　前の馬に結び付けた目じるしの新しい真白いハンカチも駄目でした

煙草さへ禁じられてゐる　敵前でマッチを擦る事も出来ません　馬もこうなれば夜目も利かないらしいのです

馬蹄音　鞍音　谷の川に落ちて救を求める　オイ〳〵の聲　田圃に馬を轉倒して友を呼ぶ聲　援護隊からは聲を出すな　早く連れて來いと何回も警告されますが　それは無理です

「遅れた者は置いて行くぞ」

と援護隊のヒステリックな聲

「何の為の援護だ」

と言はずには居られませんでした

MGチエックの銃聲は時々聞こえて激戦を思はせます　やがて無名部落に着きました

友軍は前進を始めたのか　機関銃の音は山を越えて來ます

夜行軍を晝間の行軍式考へたのがそもそも誤算でありました

機関銃の銃聲を頼りに山麓を傳って前進しました　間近に聞えてゐた銃聲が今は相當

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

遠くに聞える時　流弾は私等の附近迄飛んで来ます

雨もやんで早拂曉です　山又山の連山が黒く浮繪の如く見えます

突然横の山麓から　テラ〳〵の敵のラッパ

戰斗能率の尠い小部隊の悲しみ　僅か一ケ小隊の歩兵に任せて安心してはあられません　私等は自衛力なき駄馬三〇頭ではありましたが

「来るなら来いし

と銃剣拔いで身構へはしてゐました

幸か不幸か　ラッパは攻撃の合圖ではなかったらしい　寄せて来る模様もありません

夜は次第に明けて来ます

此處では敵の餌食になるばかり　朝霧を透して見ますと五六百米前方の山には兵二三百名が陣地構築をしてゐます　彼我良く判明しませんので　軽機銃で三発点射で合圖しました

「アッ」

無情敵はチエックの銃口を揃へて私等に乱射乱撃を浴せました

昨朝午前四時から眠らない　綿の如くつかれた身体は空腹と睡魔が襲って来ます

敵は沈黙の中にも策略を廻らしてゐるらしく　時々罐詰罐を拾ひに来る　変装兵あるかと思へば　裏の山には數百の敵が列んで示威運動をしてゐます

捕へた支那兵の話に依ると　敵の兵力は二千と言ひ　私等は一部を警戒に殘して全員頂上に集め　晝間は沈黙して夜間敵陣突破を計畫してゐました

馬も昨夜来駄載の儘でその疲労は想像以上でありました

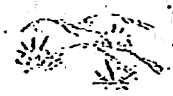
「愛馬よ明日に不遑な日であったれ」

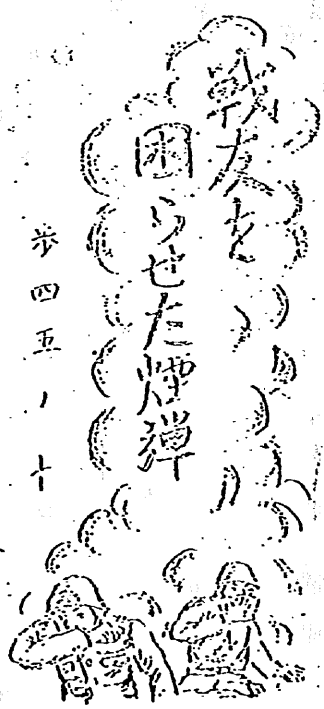
或は死を思ひ負傷を考へながら　大の字に

0856

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

なり 鉄砲を枕として眠ると云ふ事を実し
て死を覚悟するのではありませんでした
山の日暮は早く午後七時半には四方の連山
も霧に包まれて愈々出発準備を全了しました
愛馬を馬をおろして沈黙の黒い影は進みます
支那兵の案内で山を越え谷を渡りて前進中
一斉射撃の砲撃を 晝間の山辺りに聞きま
した
私等は夜陰に乗じて虎口脱出策に成功し無
事生還する事が出来ました
脱出に成功した陰には捕へた支那兵のよき
道路案内が起因してゐます
此の生命の恩人支那兵は中隊の苦力に使用
して可愛がってやりました





巻四五ノ十

坂口日曹

寧國城内に警備についてゐました 大隊が
水東鎮に廻った討伐の時です その前日も
飯は食はず 當日も夕方やっと飯にありつ
きました チャン酒をすき腹でやったもの
ですから皆酔ってゐました、
その折前方から敵兵が来ます 捕へやうと
してゐますとホラ穴にかくれてしまひました
その近くまで行くといきなり射撃をはじめ 春田伍長は手榴弾のため負傷するし
外に兵も負傷しました
中島小隊長殿も

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「これでは中譯ない」
と言はれる　手榴彈を投げ込まうとしても
近寄れぬ　催涙筒をやれといはれ　擲彈筒
もうてず　煙彈も友軍分隊があるため危い
やつと決斷して手榴彈で彈着をみ　煙彈
を射ち込む
野平軍曹や兵も　自分達の射つた彈のため
避けまどひクリークに飛びこんだのでした
夜歸つて來た野平軍曹の服には燃がまだ
燃えてゐましたので心配して土にすりつけ
て落させました

兵器愛護心に感激す

歩四五ノ八　迎津賀中尉

コツ〳〵と並びの惡い石道を踏む軍靴の音
がいやに耳に響く暗い靜かな晩でした　宣
城縣泉南約三里孫家鋪と言ふ部落での話で
有ります
昭和十三年の四月も末に近い例の支那軍五
月攻勢の直前で　私が擔任の部落北端分哨
巡察中の事　肌持ちの一番良い頃で時刻は
二十三時を少し過ぎたと思ふ時分でした
晝間の疲れで良く眠つて居るのでせう　心
持ち良さそう友兵の鼾きが哨舍の外まで洩
れて來るのでした　何時も乍ら
「御苦勞」
と形の通り控え兵から情況を聞いて居りま
すと　何處かでカチ〳〵と忍びやかに金屬
性の音がするのに氣付きました　時刻が時
刻だし近く支那軍の總攻擊もあるらしいと
聞いて居た矢先ピンと緊張して
「何だあれは」
と耳を峙てると先刻の控え兵が　何あんだ

0858

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

あれかと言つた顔で

「山元が軽機の手入をやつて居りますし」

と直ぐ教えてくれました　今頃兵器の手入をするとはと思つてそつと音を頼りに近づいて行きますと道路を隔てた反對側の家の中から幽かに灯が漏れて居ります　仮眠中の兵隊の邪魔にならぬ様　離れた所で手入れをする優しい彼の心を見た様な氣がしました

そつと近づいた私は戸口から中を覗いてハツとしました　何かしら大きな力厳かなものを感じてぐつと身内の引締るのを覚えました

仮藍堂の支那家屋の中　ポツンと置かれた机を前に　静かに部分品を磨いて居る姿　眞剣な眼　満足しきつた顔　それは神々しいまでに美はしい姿でありました　そうです　私には確かに美はしいと言ふ感じが殘つて居ります　神秘を含んだ様な あの場の空氣を今も尚はつきり思ひ出せる様な氣がするのですが　と言つて仲々口には説明に苦しみます

そしてあの雰圍氣を心無くこはすのを恐れてそつと立ち去つた當時の事を忘れる事が出來ません

寝た間も離さず可愛がるとか良く申しますが　彼の場合はもつと〳〵深刻で切實なものがあつた様に思ひます

「山元は軽機を他人に扱はせぬぞ　奴は軽機が吾が子なんだらう」

等冗談らしく言ふ戦友等の言葉は平素から聞いては居たのですが　之の事實を見てすつかり感心させられました　そして又一面一体何處からあんな強い兵器愛護心が生れて來るものだらうかと不思議にさへ思つたのでありました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

横山元伍長（當時上等兵）は明けて五月二日予期通り來襲した支那軍と交戰中　孫家鋪北方約六百米の發電所台上で負傷　遂ひに護國の鬼と化しましたが　其の日不思議にもそれまで一度も故障の起きなかった彼の愛銃が二度までも故障を生じた事を今思ふとこの事柱石を知らせて居たのではありますまいか

出血の爲今にも昏倒しそうな彼が私に殘した最後の言葉（當時は之れが最後にならうとは誰も思はなかった）

「中隊ありませんあ奴ッ（輕機の事）さへしっかりして居たらもうと〳〵殺つつけて居たものを」

と言ふのを聞いた時はぐっと胸がつかえて女々しいと思ひつゝもおい〳〵手離しで泣き度い樣な衝動に駆られました

交代射手の林上等兵の手にダダーッと快音挙げて敵を制圧中の愛銃の音に耳を傾けて居る蒼白に変った彼の顔を見て居る中に嗚呼この責任感だ　この大きな責任感があの度はずれた兵器愛護心を育て勇敢な彼を造り上げたものだったのだとはっきり知る事が出來ました

今日尚私の隊に活躍中の彼の愛銃が他に比して機能も良いとの事　内心吾が意を得たりと思って居りますが彼の英靈も嘸かし草葉の蔭で満足してゐる事でありませう

兵器の愛護心それは吾が忠勇なる皇軍勇士の強烈なる責任感の表はれで無くて何でありませう

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

小隊長殿をやっつけた

歩四五ノ七　岩坪軍曹

昭和十三年五月　我が部隊が孫家鎮の警備に着いた時の事であります

孫家鎮周辺の敵は實に執拗に出喜して来て寸時も緊張を許さない情況でありました

孫家鎮奪回の企圖をもって捲土重来した敵を迎へる我が部隊は部隊長以下闘志満々張り切って敵殲滅の萬全の策を講じました

五月一日が来て孫家鎮の街も闇に包まれる頃になると車輪を流す様な豪雨となりました

午前三時ドカンと砲弾炸裂の音に目が醒めました

愈々敵の総攻撃が開始されたのであらう

續いて敵の野砲迫撃砲が一斉に火を吐き出した　宿舎附近に盛に落下して藁葺の小屋が焔々と燃える

ずは敵襲と陣地へ駆けつけました

白々とした暁け方の霧の中に敵兵が蠢動してゐるのがみえる

「それ撃て」

と機銃の猛射を浴せたので陣地前の敵は沈黙しました　すると右陣地正面に迂回した敵は陣地前五六十米の家屋の崩れた跡に遮蔽して盛んに手榴弾を投げ出しました

小隊長松丸小尉殿は一ケ分隊を以て前進やがて彼我両軍の猛烈な手榴弾戦となりました

激戦十五分頃目を感じた敵は算を亂して逃げ出しました

それっ逃がすなと小隊長殿は抜刀するや真先に追撃される

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

敵は進げながらも手榴弾を投げる
小隊長殿の身辺に炸裂したのが小隊長殿の大腿部を貫いた　小隊長殿は其の場に殪れられた
敵は青い麥畑の中に姿を消してしまひました
畜生と切齒腕腕して口惜しがる
重傷を受けた松元小隊長殿は出血多量のため僅か二時間後には昇天されました
親とも頼む小隊長殿を失った吾々は報復の一念に火の様に燃え立ました
五月二日も敵は歩砲協力して四方より包圍攻撃して來ました
後方との連絡は全く遮断され孤立無援となつて弾薬も次第に缺乏したが五月三日漸く後方との連絡がとれた時は實に嬉しかった
此の戦斗に於て小隊長殿を失った事は　非常に無念でありました

孫家舗討伐
無類の香水

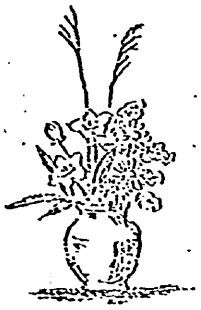
歩四五ノ二　　時吉上等兵

孫家舗近くで私は小村一等兵と潜伏斥候に出ることになりました
朝の四時頃です　とても暗くて鼻をつまゝれても判らぬ位でした
膝まで位の川を渡って行くうち小村がどん〳〵一人先に行って了ひます
「小村〳〵　待たんか」
と小聲で呼びますが闇の中で姿も聲もありません　そのうち
「しまつた」
と言ふ聲　私はハツとして聲の方へ近寄り
「どうした　小村〳〵」
と呼びますと糞だめの中に落ち込んだとい

0862

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ふのです
なる程そう言はれてみると異臭ぷんぷん鼻をつく有様です
敵中とは言ひ乍らつゝ吹き出したくなる可笑しさを押えながら夜明けを待ちましたが　側に寄れば臭いし離れて居れば淋しいし　手傳ってやりたいにも手は出せんし
實に無類の香水の芳香になやまされた潜伏糸候でありました
夜が明けて見ると握り飯も皆ライスカレーといふ有様　私ののを二人で分けて食ひましたが　中隊に帰ってからも大笑ひでした



我等の田中軍吉隊長殿

歩四五ノ十二　川野富男

私が中隊長殿に始めて御目にかゝったのは寧國洪林嬌でありました　私共初年兵は蕪湖に上陸寧國を経て洪林嬌西湯村迄七里余を行軍し乍ら途中敵の襲撃を受けるなどして昭和十三年五月十三日に警備地に到着いたしました
此處で私共初年兵十八名は第十二中隊に編入される事になり　當時の中隊長田中軍吉大尉殿から温情溢るゝ御訓示を受けました
一死奉公　断じて先輩諸勇士に敗けてはならぬと心にかたく誓ひました
五月二十一日は鬼山の討伐であり十　私共

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

初年兵も早速この討伐に連れて行って頂けることになりました。これが私の忘れることの出来ない初陣です

鼠山の敵陣地は塵柴があり　掩蓋壕があり更にトーチカ迄構築されて仲々堅固な陣地であると聞かされました

いん〳〵と轟く砲聲の下を駒をとばらかせ作ら戰友に續きました。中隊は敵塵柴と相對峙する小高い山を占領　此處で突喪準備をいたします

彼我の重火器の應酬は物凄いばかりでした

友軍の砲弾は次ぎ〳〵に敵の掩蓋塵柴を吹き飛ばします　その光景は全く映画でも見る様な氣が致しまして緊張した中にも何んだか夢心地といった感じであります

然し損害は敵ばかりではありません　友軍にも忽ち四、五名の負傷者が出ました

敵は死者狂ひです　特にチエツク機銃は頭も上げられない程猛烈に正確に猛射を浴せかけます

こうした中に我等の中隊長殿は鉄兜も未だ被っては居られません　そして絶間なく敵陣を觀ては軽機に擲弾筒に射喪の目標を命じて居られるのでした

初陣の私は敵が見たくてたまりません　戰友三四人と山の中腹を匍ち上りますと丁度中隊長殿の居られる足下に出ました

頭を上げて敵の方を見ようとした時です

「馬鹿　危いぢやないか下がれ〳〵」

と物凄い大聲で叱られました　中隊長こそ危いじやないかと　ぶつ〳〵言ひ乍ら中腹まで退りました

その頃から友軍の砲喪は一層猛烈になりました

間もなく中隊長殿の軍刀がさっと天空をきってひらめきました　突喪です

0864

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

私も遅れてはならぬと陵線に駆け上ります
と　もう中隊長殿は敵塵衆に迫って居られます
軍刀が前後左右に振り下される　忽ち敵死体が三ッ中隊長殿の足下に横りました
無我夢中のなかにも　この光景は強く頭に焼きつけられました
喚聲が敵陣地深く何回となく上りました
突撃成功です　敵の遺棄死体が十数個ころがって居ます
向ふの山脚を轉ぶ様にして逃げる数十名の敵に想起の火蓋が切られました
敵山山天地も轟けと万歳が三唱されました
私の初陣にかくも恵まれた愉快な印象に満ちて居ります
我等の中隊長殿に就ては語る可き多くの逸話が澤山ありますが　今は某要職に栄轉日

夜間軍のために御盡瘁下さる隊長殿の御武運を遠かに萬部下の一員として祈らせて頂きます

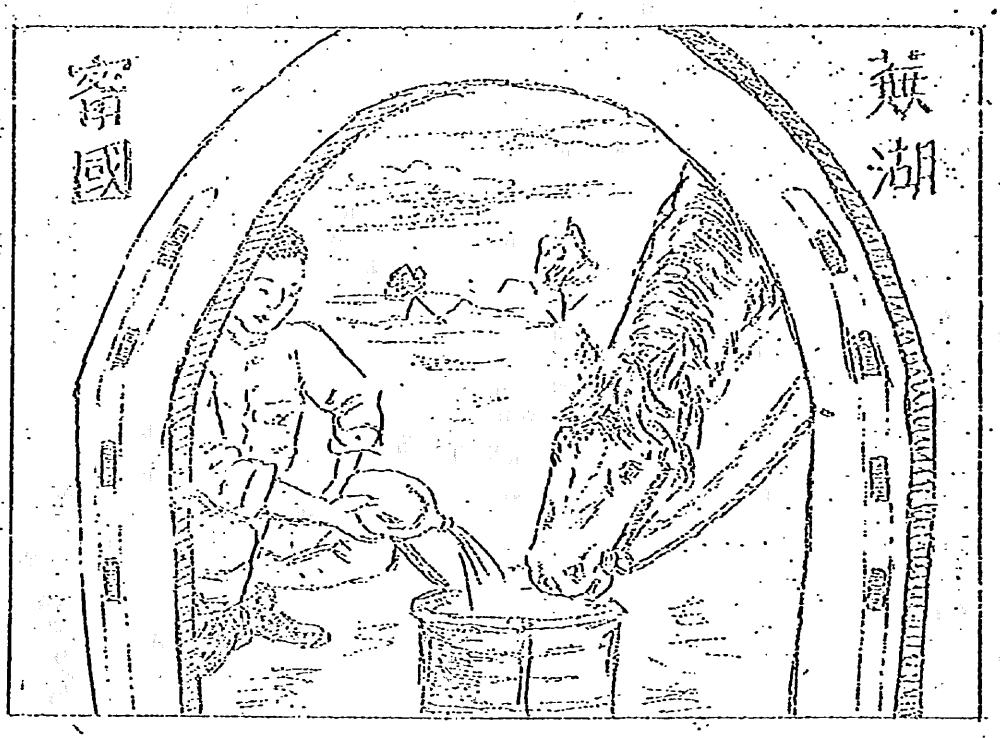
歩四五　亘ノ十二
歩兵大尉　田中軍吉

天の下知しめとむ鳥の御軍ぞ
御旗を立てむ地の果までも

大伴や久米の子たちになど負はむ
神々見ませ昭和の御軍

日の丸は我打ち立てむ君が代は
共にうたはむ外国人と

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



目次

病馬を拾ひ集めて　輜六ノ本部　輜軍曹　野中良則
輸送部隊を襲ふ敵のゲリラ戰法　輜六ノ四十七班
母の手紙　輜六ノ一　輜一等兵　久冨正勝
糧秣輸送警乘兵　輜六　鶴田軍曹
土民達の應援　第三野病　稽本衛生伍長
サイダー代用品　第三野病　軍医少佐　河端宏
歸者の傷口をさぐる　第三野病　黒木衛生軍曹
寧國警備と敵襲の襲來　第四野病　吉丸軍医中尉
襲はれた自動貨車　第二野病　衛生軍曹　岩本政夫

0866

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

病馬を拾ひ集めて

輜六ノ本部

輜軍曹　野中良則

南京を目睫にした私達は　足の痛みも眼さも打忘れて意氣益々軒昂たるものがありました　然し乍ら北支の戰斗で　或は十數日の船中生活の疲れで　愛馬ぼどし〳〵落伍する　車輛を輓いたまゝ動かなくなる　水を飲まない　勿論馬糧も食はなり迄弱つてゐました

恥しいこと乍ら　當時班長だつた私は乘馬にも車輛を輓かせました　もう予備馬も一頭もゐない　こゝで一頭の馬を斃したら車輛を捨て積載品は自分達で擔がなくてはならぬ　其の心配たるやー通ではありませんでした

途中取殘されてポツンと立つてゐる馬がゐるとそれをどうにかして連れて行かうとする　しかし之も急追撃の前にはどうすることも出來ませんでした

こんな苦勞をしながら　南京も陥落してどうにか所定の任務も了へ　南京城外に宿營することになりました　二三日經つた或日私と同じ苦勞をして來た班長の下士等兵の二人は小隊長殿に呼びつけられました

何事だらうと急いで行つてみると大變怒つて居られました　小隊長殿が言はれるには「北支以來　お前達の二ケ班が何時も他の班に比し馬の能力に乏しく　一番斃してゐる　それでお前達は平氣で　一つも誠意がない　今まで死なした馬の員數を揃へろ」、とまで叱られました　今迄馬のことに就いては幾度となく注意を受けたのでしたがこれ程まで叱られたことは初めてでした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

北支だったら支那馬でも徴発出来たものを
まさか他部隊の馬を盗むわけにも行かな
いし　どうしたものかと班員と共に惱んで
見たところで仕方はありません
他の班長は立派に乗馬して　何等馬の事で
心配する様子は見えない　たゞ二ケ班だけ
がかうあるといふのはかねての不注意から
だと　翌日は班員を勵まして早速馬拾ひに
出かけたのです　馬拾ひといふと　何だか
をかしいけれども當時南京に集った各部隊
が警備のため各地に向けて移動を開始しま
したので　その發った後とか　もと来た道
を後方まで下って　糧食携行で出かけ一日
中歩き廻りやっと二三頭探し出しました
しかし人の捨てたものにろくなものはない
ほ此の事で春中一杯大きな難儀をしてゐる
もの　蹄叢炎で歩けない馬・裂蹄の甚しい
もの等　實際役にたちさうにもない馬ばか
りでした
それでもどうにかして　宿営地迄連れて来
て馬證を與へたり　治療をしてやったり
入廐の手續をとり　漸く病馬廐にひいて
て行くことが出来た位でした
私達が新警備地たる蕪湖に移動してから
數度の宿國輸送をやってゐる中　かくも大
きい傷だった馬が治癒して帰って来ました
早いものは宿國輸送にも使用出来ました
小隊長殿にあれほど深刻に言はれた甲斐
あって　次期の徐州會戦には堂々と他の班
と一様に積載品も積み　中支に轉戦以来始
めて私も乗馬し得て　何の苦もなく　どん
な泥濘でもひりをとらなかったのであります
あの時小隊長殿があんなに言はれずに　又
私達が二人で馬をとたゞ見捨てゝ置い
たならゝ馬は犬死に等しい死方をしたに違

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ひなひし　私達は次々に奈良行動にまだまだ苦労をしたであらうと考へると　死の一歩前の馬を助け得た喜びと　奇効に使用し得た喜びを心から味はひ　隊長殿の叱言を有難く思ひました

輸送部隊を襲ふ
敵のゲリラ戰法

輜・六・一四　十七班

南京陥落後間もない十二月十八日のことです

やれ〳〵と思ふと再び敵　戰斗隊は直に應戰です　敵もさるもの　地の利を占めてびくともしません　友軍はジリ〳〵と前進します　敵の優秀な迫撃砲は見ごとな弾着を示す　何時間もの激戰にも敵は動揺せず

整壕　トーチカ　又は民家を巧に利用隱蔽してゐるため　弾は来るが　敵影はまるで見えません

敵弾が球になって来ました　今のうち前進

敵前通過です　決死の覚悟で前進する

輸送隊が通りかゝれば　再び物すごい一斉射撃で通過不可能です　歩兵部隊の通過は出来ても輸送隊の通過は全然出来ません

歩兵部隊だけの戰斗なら戰ひの数にも入らぬ程ですが　小しの援護隊に大輸送隊では厄介です

敵の戰法は一線部隊より　後方輸送部隊の襲撃が重点で　正にゲリラ戰法です

やむなく道路を通らず山道に入り　巧に敵前を遮蔽通過しやうと　戰斗部隊の應戰の間にそっと山道に入る　路なき山　松林の間を越山か越えました　然し敵も永くは私達の自由を許さず幾つ目かの山にさしかゝ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

るや物すごい敵の射撃　弾はバチン〳〵
ビューン〳〵と氣味惡く音を立てる　土煙を
上げ　木の枝が折れ　葉が飛ぶ
愛馬を勵まし夢中に登る　幾度か敵の射撃
を受けたが　幸に一名の負傷者も　一頭の
負傷馬も出ない
或凹地に集結　道に迷ひ　幾名かの道路偵
察が出ました
馬には朝からろくに水も飲ませず　又馬糧
もありません　誰かゞ
「水があるぞ」
と叫ぶ　皆水嚢を持て走り出す　上官の命
令もきた事　たゞ夢中で　すると又も敵に
発見され　射撃をくらふ　無意識に伏せま
した　折角見つけたクリーク　敵前です
弾は来ます　眼前に見える水を汲まずにお
め〳〵と帰るのは癪です　弾の間隙を見て
二名　三名とクリークに下り水を汲む

弾はクリークに落ち水煙が上ります
馬は嘶いてゐます　水がほしいのです
上官は
「危險だから帰れ」
とどなって居られます　振り返って見れば
愛馬は盛に前掻きをしてゐます　弾は尚来
る　しかし水は眼前土手一つです　上官の
注意も聞いて聞こえぬふりで　漸くクリー
クに下り水を汲む　愛馬めがけて一目散で
す　馬も水を見て鼻をならして迎へます
朝から否昨夜からろく〳〵水も飲ませない
のです　水嚢一杯は一息に飲んでしまふ
後一回汲みに行きたいが危いと言って上官
の許が出ません　愛馬は水のなくなった水
嚢に口をつゝ込んではなさうともしません
時々上官の顔を見ると　にらみつけて居
る様です　これは手の出しやうがないと思
ひ　やむを得ず命から一番目の自分の水筒

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の水を水嚢にうつしてやる　トク〳〵と水の出る音　目頭があつくなる　水筒には後一滴の水もない　だが之でどうやら一安心

後半日は馬だけは大丈夫

上官の注意されてある中を　又も弾雨下に一人二人と水汲みに行く者を見受ける　馬を持つ者として止むを得ぬ事ですつたとひこの身は弾に當つても馬にだけは」と馭兵の誰しも思つてゐるのですから

道路偵察は帰つて来ました　どうしても良い道は無らしい　敵前通過の外なく　一頭づゝ敵前通過　山と山との間です　距離にすれば僅五六十間のもの

馬が通るたびにものすごい一斉射撃　土煙が上る

一頭二頭と戦友達の注視して居る中を通過無事着いて向ふの山かげで手を擧げる時の氣持　次々と進むに從ひ自分の番も近づいてくる

不幸何番目かの馬が倒れた　馭兵諸共に　しかし馭兵は負傷してゐないらしい　すぐ起きた　馬を起さうとしますがどうしても駄目です　馬は即死してゐるのです　二三名の補助兵が駆けつけて積載品をおろし　馬具等一切を運ぶ　其の間も一頭一頭と通過

弾の絶え間もありません　馭兵は流石に愛馬を失つてボーッとして弾雨下につゝ立つて居ます　一人の兵がそれを向ふの山かげに引張つて行きました　去つたはずのその馭兵がいつか又愛馬の所にかけつけ　馬の頭のところにピタリと伏せました　やがてナイフを出し鬣を切り　紙につゝみ　押戴いてポケットに入れ愛馬に合掌して去りました　思はず頭が下りました

再び他の馬が倒れました　もがけど〳〵起きられぬ　馭兵はそれを起さうとする

0871

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

馬は嘶く　尻の方から血が吹き出る　腰骨をやられたのです　補助兵は駄載品　馬具其の他を運ぶ　馬兵はそれでも愛馬を弾雨の中に放置するに忍びず　一人で起さうとしてゐる・上官の命で涙々とはなれて来ました

快復の見込のない馬は銃殺するのが普通ですが・自分の愛馬に銃口は向けても引金はひけない　又戦友に頼んでも皆逃げ回って避けるのが普通です

彼の馬兵は山の麓に伴んで　もがく愛馬を眺めてゐました　其の眼には涙さえ光り戦友に誘はれても行かうとはしません

漸く危険地帯を夢中で通過し　安全な山の凹地に集結しました

一線とは三四百米とは離れて居ません　敵の砲も物すごく唸つ　又敵弾は来る　迫撃砲弾が落下する　負傷者は続出する　ボカン〳〵と砲弾が炸裂する音にまぢつて　パチン〳〵ピユーンといやな小銃弾が唸る

狭い凹地に一頭々々　と集結して来て　夕方には凹地一杯になりました

日はいつしか暮れました　戦はいよ〳〵激しくなる　馬もおぢけたと見えて　馬兵にすり寄つて来ます

戦死傷者は一晩中運ばれました　弾薬も終夜交附されました　夜半からは霜がおり寒さもいよ〳〵酷しくなりました　患者のうめき聲は身を切られるやうです　何とも手の施し様がありません

全く包囲されたらしい　四方八方から銃砲聲が聞えます

人事を盡して天命をまつ　一死はもとより覚悟の上です

東が白みかゝると共に　〇〇砲兵隊到着の報をきく

0872

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

夜は全く明けました　砲聲も止みました
やがて出発準備をして再びもとの道を引き
返しました　敵前通過をしたところに來ま
した　五六頭馬が斃れてゐました
中には馬に藁をかぶせ又何處から持つて來
たか夢にも見ぬ立派な大麥まで馬の口もと
に供給するのもあります　昨日までの馬が　夜
半に忍び出し人愛馬に供へたのでせう　斃
れた馬に藁をかぶせに行く者もあります
馬に黙禱を捧げ　目的に向け前進しました

母の手紙

輜　六ノ一

輜重兵一等兵　久冨　正勝

下ノ夕私が戰友の丹波優一等兵にきいた話で

十　從つて話の大部分は彼の言葉であり
私はそのまゝ役にすぎません
[illegible]　蘇州を出發したのが四月二
十五日だつたね
君は衛兵勤務で留守だつたよ　日用品と銃
の外には円起たつたーつ　馬を奪割れた手
には氣輕ではあつたが　物足らない樣な感
で　何だか変だつた
その日直ぐ和縣に着いた　揚子江から和縣
の間は　道路も一寸で四曲たがら今は道路
になつてはゐるが　僕等が着いた時はそり
やひどかつた
その翌日から果遠仕事を始めた　日を重ね
る中に　曲りなりにも　あの通り自動車も
通る樣に出來た　その時は實際ほつとした
よ
そして彼は息をつきました　私は飯盒の蓋
に更にチヤン酒を注ぎ足してすゝめました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

彼は嬉しんだ眼許に女の様な微笑を見せて　酒を飲みました

「それからし」　私は話の續きを請求しました

||　その晩は非んな　これで終かも知れないと、思つて居たので　ほんの少しのビールを皆で飲んだ

翌日になると　やつぱり今迄通りに朝早く起床さ　そして和縣倉山間の修理――といふよりも道造りだ　君達も見て來た筈だ戰車壕は無數だし　狭い所　崖の所は壞されてゐて惨憺たるものだつた　こんな道を輜重ばかりで　而も少數の人員でやつた日には半歳かゝると言つて　實際悲鳴を上げたよ　一寸大げさのやうだが　本當に其時は涙んな氣がしたよ

それからの苦労がどんなものか想像出來るかい　暑さは暑しれ　まあ一寸言へば便所に行くのが嫌になつたものだ　体が痛くて　私　蹴出と　ハツハ、、、、

一寸笑つたが又元の直面目な表情に還つて

||　道路修理と一口に言つてしまへばそれだけだが　それ丈の言葉がすら〳〵と言へる様になる迄にどんな苦労を通り越して來たか　本人だけしか所詮解らない事だと思ふんだ

手のマメは全部つぶれて　中には血の出るのも居るし　今から考へると良くやれたものだと思ふ　それは兎に角いゝとして　我々は朝から晩まで　一つも眼先の変らない同じ事をつゞけた　一日にわづかしか出來ない焦たしさ、一間二間と少しも捗らない時の情なさ　それでも君達がやつて來ると聞けば　少しでも心配のない立派なのをと心懸けて　から言つちゃ笑ふか知れないが　死物狂だつた　實際非常に克己力の必要な

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

仕事だった

そして西風鎮――ボラこいに来る途中に一
寸した部落があつただらう　狭い道が家の
軒下を通つてある　‖
私はすぐ思ひ出したので
「あゝ知つてる　石畳の道だろ
大体止した所だ」
‖うん　多分そこに違ない　あそこの三
百ばかり手前に差しかゝつた時だ…まだ早
かつた　さうだなあ　九時頃だつたらう
見ると道路に阻絶がしてあるのだ　小隊長
殿がすぐ気付かれて
「伏セッ」
と叫ばれた　敵の居ることを感ぜられたん
だらう　僕ともう一人（亀山）はすぐ道路
の両側に立つた　警戒の為にな　本当の、
ことを言ふと僕達はまだ敵に出遭つた事が
ないんだから

「なあにこんな所にたんで敵がゐるものか
何も聞えやしないぜやないか」
藪の中ではたがを揺すぶつたんだ　だか
ら休めるのがうれしさに　ほつと気が弛ん
だ　途端
パパーン
とやつて来たんだ‖
「へへエー」と私は身を乗りだした　次が
待たれた
‖さあ僕達も伏せた　西風鎮の部落から
軽機　小銃の弾が瞬する間もない程来だし
た　それと一諸に支那兵のお喋りまで聞え
て来るんだ　小隊長殿の予感が見事に的中
した譯だね　我々は丁度二個分隊編成で
我々第一分隊は部落の斜左に移つた　弾が
来て怖しかつたけれど　人におくれるのは
尚怖しいもんだから
二分隊の方は右翼に廻つた事が　すぐ後で

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

判つた
輕機が射ちまくつた　三挺で　そして前進
さ　敵は西風鎭を退いて　後方のトーチカ
陣地に據つた　これは一すした奴であつた
敵の兵力は百五十位　輕機三挺位　小銃
は少かつた樣だ　拳銃　手榴彈　槍と言つ
た類さ　益々銃聲は激しくなる
我々が夢中でとび込んだ西風鎭にはもう敵
は居ない　又前進そのうちに夜になつてゐ
敵を向ふの山の麓まで追やつた　しかし
夜になれば　又危險は尚更の事で皆戰死と
思つて覺悟を決めてゐる時　歩兵がやつて
來た ‖
「どんな風にして其の時敵の狙撃を殺した
んだ」
私は彼がこの事に一言も觸れないのできい
ました　すると
「やゝ　こ奴誰からそんな事をきいた」

そして　口をつぐんで
‖　知つてゐるならまあ話すが　‖
としぶ〳〵　詰り出しました　私は何故こ
んなに黙つてゐるんだと訊いて見度かつ
たのですが　彼の性格として、「別にてが
らと言ふほどのものではないのだ　誰だつ
て　兵隊だからやることなんだし　と言ひ
さうな氣がして止めてしまひました
‖　西風鎭を追出された敵は　クリークの
向ふの畦から盛に射つて來るのだ　そのク
リークは首巾あつて　その向ふの輕機の爲
どうしても渡れない　そ奴が頑强で始末に
負へない　見るとその輕機射手の傍に下士
官の樣な奴が頑張つて居て　そ奴のため輕
機が却々退かないのだと思つたんだ　僕は
思つた　こ奴をやつつけてやれと　だから
グツとクリークの縁の所を廻つてその輕機
の左側に出て　そ奴を狙撃した　それが僥

0876

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

俥にもあたって　そして更に下士官と思ったのが准尉だった譯さ‖

彼はあまり多くを語らず　私もあまりくどくはきくませんでした　彼を知ってゐるから無駄だと思ったからです　彼はその言葉に出さない所の勇氣と沈着はさう誰でもが持ってゐるものではありません　私は訊ねました「どうして　そんな思ひ切ったことが出来たのかいしと

甚だ無躾な質問です　すると彼は酒のためほんのり赤い頬を更に染めて

‖　僕も不思議に思ってゐるんだ　その前々日に手紙が来た「家の事は村の皆様のおかげで　お前が居る時以上何事も申相談できる　お前はお母さん達のためばかりで出征出来てゐるのではありませんよ　よくこゝのところが解ったら　一生懸命働いておくれ」と書いてあった　その爲落着いた氣持になれたといかも知れぬ／知っての通り家は貧乏で　後にあるのは母と弟だけだんだから　不思議だよ　實際‖

そして又

‖　兵隊を強くするのは一寸した同圍の愛情で足りると思ふのだ　戰斗間に於て兵隊は死んで行くのに必要な　是非共必要な感情と言っていゝのか　本能と言ふべきか　本人はその時こそ意識してゐないんだが　ものだけしが持ってゐないのだから相‖　私達は明日のために床につくことにしました

敵迫くふとさぐりいり物入れの
汗にじみたる母のたよりを

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

糧秣輸送警乗兵

輜六本部　　鶴田衛生軍曹

南京陥落後　部隊は蕪湖に駐軍警備の傍蕪湖　寧國間の糧秣輸送の大任につきました

雨後雨の日も風の日も吹雪の日も変りなく二十里の行程を軍需品の輸送に従事すること数回　漸くにして敵のため破壊された蕪湖　寧國間の鐵道は　鐵道隊の改修により開通する様になりました

さて私達の輸送は鐵道輸送に変り列車警戒の任につきました

昭和十三年四月三十日私達〇〇名は大洋少尉殿指揮の下に警乗の命令を受りました

早朝宿營地出發　蕪湖車站に到り軍需品を満載した〇車輛の警戒の任につきました

途中沿線は一面青田と化し支那農民たちは一生懸命働いて居る　植付けの最中のところもある　汽車は其の中をうねり〳〵して湾沚鎮車站につきました

此所で一部の軍需品を車下し又連絡者なども降りました

〇分の後列車は寧國へ向って驀進しました

丁度寧國前八粁位の位置　橋頭汪家車站附近迄進行すると運悪く機關車に故障を生じました

機関手は汗みどろになり修理に熱中しましたが重要箇所蒸氣釜破損のため止むを得ず同車站構内に入り蕪湖車站に機関車の救援を依頼しました

當時同地は歩兵第四十五聯隊一ケ小隊で警備して居り隊長に連絡を警備隊内に宿營する様になり、一日の輸送計画の糧秣輸送で

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

携行糧秣もなく　糧秣を受領して宿営準備
にとりかゝりました
翌日は五月一日で丁度敵が五月攻勢を一斉
に企圖し居る情報が入つたので歩兵輜重と
も不時の用意に遺憾なき様武裝を整へ寢
につきました
午前三時頃敵は案の如く夜襲をもつて高林
警備隊駅警備隊に對し攻撃を開始しました
同時に警備隊及輜重も非常配備について
應戰しました　敵は猛烈にたゝり一段と兵力
を増加して執拗に抵抗して来ましたが四時
間に亘る猛射に敵も一時退却した様子です
私達は任務遂行のため午前八時　機関車の
救援を待つて寧國に向ひました。途中歩兵
の一部と協力して沿線附近の敵を撃退しつ
つ又鐵道を破壞してある箇所を修理しつ
つ列車は徐行し二粁位進行しました
此處から一方は山岳部に入るので列車は急

遂如で驀進を續けた刹那　山麓の陣地から
機関銃小銃は機関車に向け一斉に火蓋を切
つた
私達は直ちに應戰し列車は彈雨の中を驀進
を續ける
此の時　負傷二名を出しましたが　列車は
敵中突破により漸く寧國車站にすべりこん
だ　後負傷者は病院へ送り　私達は寧國に
宿泊しました
翌朝出発歸途につきましたが　昨日の敵は
いづこへ逃走したものか　影もなく　只沿
線の草叢に夏虫が鳴いて居るばかり
緊張のうち橋頭汪家車站につきました　同
警備隊に連絡をとると昨日の敵は湾沚鎮方
面へ移動したとの情報　尚更警戒を嚴にし
て進行中鐵道線路に又も障碍してあり來組
の滿鉄保線員により復旧しました
私達は下車　列車と併行して一里余り徒歩

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

で附近を警戒しつゝ漸く湾泄鎮につきました　小憩のち再び蕪湖に向って進みました　その時は初夏の夕陽は既に低く揚子江の濁水にかゞやいて居ました　列車は漸く蕪湖車站に着きました

一日計畫の輸送も三日がゝりで漸く其の任務をなし遂げたのでした

土民達の應援

第三野病

橋本衛生伍長

南京陥落後間もなく　師團は蕪湖方面に轉進することになり　自分は設営のため大島准尉殿と先発　第十一旅團の設営者と共に戰跡新な揚子江岸を蕪湖に向って　十二月十五日午前十時七台のトラックに分乘出発しました

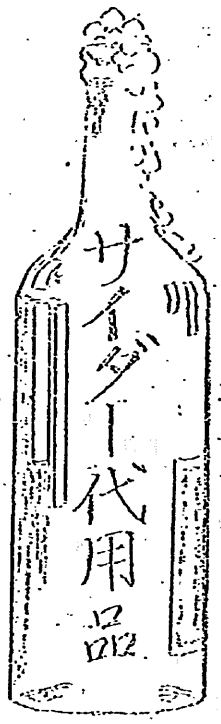
途中道路の破壊とか橋梁の焼失のため夕方ならぬ難行軍をつゞけ　午後四時頃太平府に入ることが出來ました　両側はクリークでした　トラックは六十自至七十哩位のスピードで疾走中　車輛の故障のためか「アツ」といふ間もなく　人も車も材料もクリークの中に顚落　乘員二十四名は全しのズブ濡となり危く死傷者を出すところでしたが　辛ふじて道路上に這ひ上り一同無事を喜びあひました

早速焚火で被服を乾し　傍ら自動車を動かさうとしましたが　二十四五名位では　どうとも手のつけ様がなく一同閉口して居ると　土民たちがワイ〳〵あちこちで騒ぎはじめました　さては少数と見て危害を加へるのではなからうかと心配してゐましたが　案に相違して各自綱とか何とか持参して

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

三十名余りの土民が集って来ました
そこで十三聯隊の某准尉殿の発案で水中のトラックを引揚げさせ様との事で 土民を手傳はせ綱をつけて引くけれども動かない
その中土民が何やらわめいてゐましたが
その長らしいのが 数名の若者に命じて
あの寒中に裸のまゝクリークに飛び込み首迄浸りながら後方から極力押上げさせ又陸からは手に手に綱を握って引上げ やっとのことで道路上に引あげることが出来ました
みんな歓声をあげて喜びました 七台のトラックの内最後尾でありましたので 前への連絡は途切れ 此のまゝトラックが上らなかったら 敗残兵の出没する中に宿営するか 又蕪湖まで八里あまりの路を夜行軍するかの二つに一つしか方法はないと心配してゐたのでした
幸にも思ひもよらぬ犠牲的な土民たちの應援 しかも敵地で受けた彼等の好意に依り不安も消滅しました
十三聯隊の某准尉殿は旅團の某主計殿と打合せ通訳を通じて 土民達へ謝辞と報労金として五圓を分配されました
私は敵國の土民に對してさへ謝辞を述べ謝礼金を渡された幹部の方々の 日本軍人的な立派な態度と そして又配られた五円の金を手にして喜ぶ土民達とを見比べつゝ
数分を過して實に愉快でした
数分前の死地を脱した氣持と比較にならぬほど誇りやかなそして爽快な日本軍人の正義感に酔ってゐました
互に土民に謝辞を投げ再び車上の人となり本隊に追及しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



第三野病

軍醫少佐　河端宏

無湖に病院を開設してゐた即ち昭和十三年二月十二日　十三聯隊遠射砲中隊の歩一新垣繁雷が入院しました　右腰部貫通銃創の相當重傷で間もなく手術しましたが　その結果腸貫だと判明しました

中隊長殿が面會に行けないからとて　中隊長殿の立派な寝具を附添に持たしてやって居られました

患者は意識明瞭で軍医の命をよく守ってゐました　何分腹部の事で食物を與へられず唯注射のみでありました為　日毎々々に衰弱が加はって行く　そして口渇を訴へるが與へたら悪いので與へさせなかったのです

一寸油斷をすると氷枕の水を飲まうとするので看視怠らなかった

入院約四日経過してから激しくサイダーを要求するので附添の浜田上等兵が軍医に此の旨を告げた　軍医の診斷の結果

「もう余命幾何もないので本人の希望通りしてやったがよからう」

といふ事で　早速サイダーを求めに街に出ましたが　一度ないで却々みつからない

患者は「サイダーは来だか〳〵」と衰へ切った眼で哀願してゐる

「もうすぐだから暫らく待って居れ」と慰めてゐましたが　死のかげがさしてゐると直感した浜田上等兵は　氷の中へ重曹を入れてサイダー代用品を造りました　そして急いで枕邊に來て

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「新垣　さあ　サイダーだ　飲んでくれ」
と差出した
「そうか　有難う」と言ふ新垣一等兵の眼
には一杯の涙が光って　さも嬉しそう有微
笑を口許に浮べて浜田上等の顔を暫くみつ
めてゐたが　やがて力ない手を差出して
ふるへつゝそれを握り　おいしそうにゴク
ゴク　と喉を鳴らして一息二息と飲んで
ゐました
「嗚呼うまかった　有難う」
と厚く礼を述べてゐたが　安心したのか
かすかな寝息で眠りました　思いたしか頬
に紅味がさして満足さう有和やかな寝顔さ
覗き込んで浜田は涙を浮べてゐました
そして四時間程後
「中隊長殿や戦友によろしく言ってくれ」
とはっきりした謝辞を述べて安らかな笑を
浮べて息を引き取りました　そうしてゐる
中に街にサイダーを買ひに行った他の一名が
眞實のサイダーを下げて急いで来ましたが
彼の厚意も空しく　今は既に神去った後
でした
浜田から一部始終を聞いて
「そうか　新垣　遅かったでしかしこゝが君が
欲しがってゐた眞物のサイダーだ　さあ飲
んでくれ」
と涙をポロ〳〵こぼし乍ら　死んだ新垣一
等兵の口を開けてサイダーを入れてやりま
した
「おいしいか　新垣」
新垣一等兵の霊も之を聞いて　どんなにか
甚厚い友情に感謝して　喜んで飲んでゐる
であらう
並居る軍医も衛生兵も之の美しい情景には
只泣くのみでした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

患者の傷口をさすり

第三野病　黒木衛生軍曹

蕪湖で私が病室不寝番についてゐた時のことです

歩兵四十五の六中隊の大隊副平伍長は入院後一週間位で　瓦斯壞疽のため脚を切斷したのでしたが　切斷口が痛くて寝れないと言ひます　私達も晝間の勤務に相當疲れてゐたのですが　今更自分の身の如何を言ふ場合ではないと思ひ　その傷口を按摩ゐたいに撫でゝやりました

すると氣持よさうに眠るのです　安らかな患者の寝息を聞けば　又患者の滿足な狀態をみては私など少しも勞苦など感じ氣はしないのです　かうして十時頃から夜半の三時頃迄根氣よく續けてさすってやりました

其の後一月四日に後送したのですが　内地帰還後も再三謝礼の便など呉れます

寧國警備と敵機の襲來

第四野病　吉丸軍醫中尉

寧國に三十日到着　病室の準備其の他で多忙な中に十三年の元旦を迎へました

當時寧國の城内には支那人は一人も居らず　空屋ばかりで全くの廃墟でした

當時此處は敵の第一線で朝から晩まで敵の攻撃が續くやうな狀況でした

0884

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

寧國で一番印象に殘つてゐるのは一月十二日のことです
天氣晴朗で私達軍医連中は野外に出て運動して居ました　丁度行李班の前が学校の運動場で廣場がありました　ピンポンとか砲丸投げんかやつて遊んでゐた譯です
ところが横の方から飛行機が三機頭上を通り過ぎたかと思ふと　又三機南方から飛んで來て北の方へ行きました　相當低空でみんな空を仰ぎ乍ら
「友軍機は勇しいなあ」
と言ひました　又三機東の方からやつて來ます　其の時或將校が
「敵機だ」
と叫びました　その瞬間相當の數の爆弾を落しました　みんなかけだして避難しました
一二歩行つた時大きな音がしました　丁度駅の横手を目がけて投下した樣に思ひました

其の後敵機の空襲は五六回ありました　當時蕪湖南京は相當被害があつた樣にきゝました　又湾止鎮も被害がありました
寧國に五回目に來た時だつたと思ひます　午後六時頃隨分低空して來ました　今日は大分危いぞと思つて居ましたら　野砲隊の處に數発ドカン〳〵と落して行きました
其の時負傷者が二名出來ました
全く空襲は防ぎ樣がありません　其の後敵機が來ゝば手動サイレンを鳴したりして警戒し　皆にしらせる樣にしました　又各隊も防備に務めました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

私達が甯國に居た三ケ月の間には湾止鎮甯國間には敗殘兵が多く　一時は自動車の交通は勿論車輌の交通もへ出来難い有様でした

自動車十何台が湾止鎮から甯國に行く途中敵襲を受けて　どうしても行けず　其の時は歩兵の警衛兵が約二ケ分隊ついてゐましたが　止むなく引返したやうな状況でありました　敵が有力で進めないので　後退しやうとしましたところ既に後方にも敵が廻つてゐて　苦戦中を應援隊が来てやつと敵を壊退しました

其の當時當隊の行李の者が入院して原隊に復帰途中で度その敵襲に出會つたのでした

敵が接近して来ても本人は銃も持たないので敵と組討ちをやつたと言つて居りました

襲は孔子自動化奥車

第二野病

衛生軍曹　岩本政夫

我が部隊が廣德討伐後　甯國で第四野戦病院と業務の交代をして　病院を開設したのは昭和十三年四月初でした

季候はよし　草花は乱咲き　蝶は舞ひ　ミエーン〳〵とたくはえた様な睦たさうな山羊の聲　城壁に立つて廣々とした田や丘を眺める時は　實に長閑な平和郷でありました

然し自然と人事とは大きな異ひでした　否全くそれは反對でありました　敵襲の都、呪はしい地なのです

幾多の英霊を冲天高く舞ひ上らせ　護國の鬼と化せしめた地であり　未だその續きを

0886

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

演出して居る地なのです
梅や桃の實のつぶらに結ぶ頃 降り出した雨は小止みもなく降り續け 土砂を流し橋を流しました たゞ小高い城内だけを殘して 園圃を一面海とし 道路と畑の境を無くすると共に草も木も水底に沒し去り各方面との交通も全く杜絶されました
やがて次第に減水し ホッとして眺める人々の眼に入るものは 泥土の中に露出された慘憺たる狀景でした
私達の命の綱と頼む鐵道も 各所に鉄橋は流失し 線路は破損し全く駄目になりました 糧秣彈藥の輸送に大きな支障を來した今となっては たゞ自動貨車に頼る他はありません 勿論これは途中幾多の危險を伴ひましたが 仕方のないことでした
命令に依り坊野主計軍曹と佐藤清人軍曹と共に 自分も 衛生材料受物資調達並に當

隊第三軍部へ連絡のため 蘇湖に出張することになりました
六月二十四日午前八時でした 糧秣輸送の自動貨車に便乘を頼み寶國を出發しました
照りつける盛夏の日光も 朝の涼ほとゞ感じず りゝ氣持で新鮮な空氣を胸一杯に吸込んで居ました
やがて速度を早めると共にまくし上げられる塵埃をさけるためかけた「マスク」に息苦しくはありましたが 水害の跡を眺め語りつゝ 約四十分も疾走してゐました
車が寶國と高林との中ほどにさしかゝり 兩側の高さ二米位のところを通過しようとした時 近くの小高い丘に青服をまとった中國人の姿を認めました
平然として居る姿は ぼんやり自動車を見送る農民としか思へませんでした
先頭車が其處を通過しようとした時 俄然手

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

榴弾の炸裂の音が　ガアーンと響きました
それを合圖に續く數十発の弾音は天にも
轟くばかりで　容赦なく捲き上げた　乾き
切った埃のため　前後は全く見えませんで
した
自分の乘ってゐる二輛迄は幸じて煙幕のや
うな埃の中を突破することは出來ましたが
後の三車輛は中絶されて姿を見ることが
出來ません
「嗚呼　今度だけは没法子だ　こゝが最後
の地か」
とつさに脳裡に浮ぶと共に
「負けてなるか　きつと勝つ　皇軍には神
佛の加護がある　天祐は必ずあるのだ」
と強氣にはなつたものゝ　如何せんたより
にするはたゞ拳銃と銃劍一本
自動車は止つた
警察兵は小隊長以下僅に十七、八名　しかも
前の二車輛には五六名しか居ません
一同一齊に躍び降りました　自分も降り様
としてふと氣付いたのは前方五米の地点か
ら　こちらを狙つて居る中國兵でした　咄
嗟に拳銃を握りしめました
その瞬間「がーン」と耳をうつた銃聲に
「やられたッ」
と思ふと一諸に姿勢を低くしました　然し
又バネ仕掛のやうにとび起きて　引金をひ
きました　馴れたいやら氣が急ぐやらで
殘念ながら命中しません
再び敵の銃聲が耳を劈きましたが異常はあ
りません
敵の居る側に躍び降りると同時に起つた
友軍の機銃聲　小銃の音　敵は退却の態勢
に移りました　友軍はこの時とばかり　益
々攻勢に拍車をかけました
交戦約三十分　やがて舞上つた埃の鎮まる

0888

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

と共に銃聲も疎になりました

小隊長の引上げの命令で　一同道路上に集結しました

先づ氣にかゝるは傷者のこと　然し天はあくまでも我々を庇護してくれました　慌てて投げた敵の手榴彈は　一発として自動車には命中して居ません

だが自分の乘つて居た二車輛目の助手台に居られた　百六の軍医中尉殿は　頭部擦過銃創の爲　半面を朱に染めて居られました

然し別に痛みを感ずる色も見せず　平然として微笑しながら

「やられましたよ　前方に居た狙撃兵の第二発目のためにね」

と言はれました

創の手當をしたのち　弾跡をみれば　助手台の扉を打抜いて　又ボデイの鉄板まで貫通して居ました　自分の耳に強く響いて

しまつたと思つたのも當然だと思ひました

尚坊野軍曹も右目の上に僅少な破片創を受けて居ました

他の自動車はエンヂンをやられて居るのもありました

敵は「六十九師上等傳達兵」と名入りの服を着た死体一を遺棄してゐました

やがて運轉開始の聲と共に前進を初めました　高林警備隊に到着してやられた自動車を殘置して一路湾上鎮へと向ひました

敵襲の

あと靜かなり

青葉風

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

奉祝
記念
紀元二千六百年

不許複製

轉戰實話
南京攻略戰

限定 壹百貳拾部中
第 號

昭和十五年十月三日

於中支
町尻部隊本部
戰史編纂班

1435

0890

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp